

人文社会科学部後援会事業実施報告書

申請者氏名：原口弥生（3 教員担当の授業。
うち伊藤哲司担当学生分についての報告）

申請 No. 25（事業費）

事業区分：学生の教育研究活動支援

対象学年：3 年次 14 人（うち支出者 3 人）

内容

報告項目：社会調査演習Ⅲ実地調査（伊藤担当学生分）

報告内容：以下に記述

水害で被災するという体験と地域コミュニティのレジリエンス

現代社会学科国際・地域共創メジャー教授 伊藤哲司

1. 伊藤班のテーマの概要

2019 年 10 月に来襲した台風 19 号（令和元年東日本台風）は、茨城県内でも久慈川や那珂川が氾濫し、大きな被害をもたらした。その水害を被った地域（大子町および水戸市飯富地区）を歩き、被災した住民の方々からその体験にじっくり耳を傾け聞き書きをする。そしてその語りのなかから、地域の現状と直面している問題点をあぶり出し、コミュニティのレジリエンスを高めるための防災・減災の知恵について考察する。なおその前提として、当該地域の災害の歴史などについても調べる。とくに大子町では、地元自治体からの要請でもある被災の記録づくりの一部になることを、当初から視野に入れて取り組む。インタビュー調査がメインとはなるが、資料等で地域を知り、地域を歩いて観察することも重視する。

2. 参加学生とチーム構成

上記のテーマを提示したところ、14 人の学生が伊藤班を選択をし、このテーマに共同で取り組むことになった。そしてみなで相談の上、3 つのチームを構成し、チームごとに調査研究を進めていくことになった。

チーム A は、水戸市飯富地区をフィールドにした水害被災地でのインタビュー調査を

中心に展開した。伊藤が原電との共同研究プロジェクトでも関わっている地域であり、そのプロジェクト関係者も一部関わるなかで進んでいった。チーム B は、小学校での防災対応についてインタビューおよびアンケートをもとに検討を行った。小学校とのつながりは、伊藤が行った小学校での防災教室・SDGs 教室に学生たちも参加することをきっかけに深めていくことになった。チーム C は、大子町をフィールドとし、久慈川に建設されつつある堤防を巡って住民と行政のギャップに着目したインタビュー調査に基づいて考察を行った。大子町から被災の記録づくりをしてほしいという委託事業を伊藤が受けているということもあり、町役場や大子在住の卒業生との比較的スムーズな連携が実現した。

3. 得られた成果と今後の展開

いずれのチームにも、性急なデータ収集をするのではなく、時間をかけてフィールドの人々と関係を築き、そのうえで調査協力をしていただくように心がけさせた。そこで得るデータも、量的データより語りなどの質的データを中心とした。フィールドにじっくり関わることを大事にする質的研究ないしはフィールドワークを重視してほしいと考えた。そのため地域で行われる祭りやイベントなどに参加することを先行させようとしたのだが、コロナ禍が続き、そのような機会を得ることは容易ではなかった。そのため当初考えたほどフィールドに足を運ぶことができないということがやや妨げになってしまったのだが、結果的にはいずれのチームも、オンラインのツールも併用するなど、さらにこれからの発展を感じさせる展開をすることができた。

チーム A のフィールドでは、住民からも学生（この授業参加以外の学生）からも声が出た学生向けシェアハウスづくりというアイデアを具体化させていこうという動きが生まれ、シェアハウスづくり委員会なるものが立ち上がった。チーム B が展開した小学校での SDGs 教室は大変好評で、他の小学校でも同様の教室を展開していこうという方向が生まれている。チーム C のフィールドでは、水害被災の体験を語りあい共有していくワークショップを展開することで、地域のつながりをあらためてつくりレジリエンスを高めていくことが目指されつつある。いずれも通常の社会調査の範囲を越えるものであり、広義のアクションリサーチと呼んでもよいだろう。

そのような動きが顕著に生まれてきたのは、今回の学生たちが蒔いた「種」のお陰である。そのきっかけを確実につくった学生たちが、その経験を今後につなげていってくれることを期待したい。

